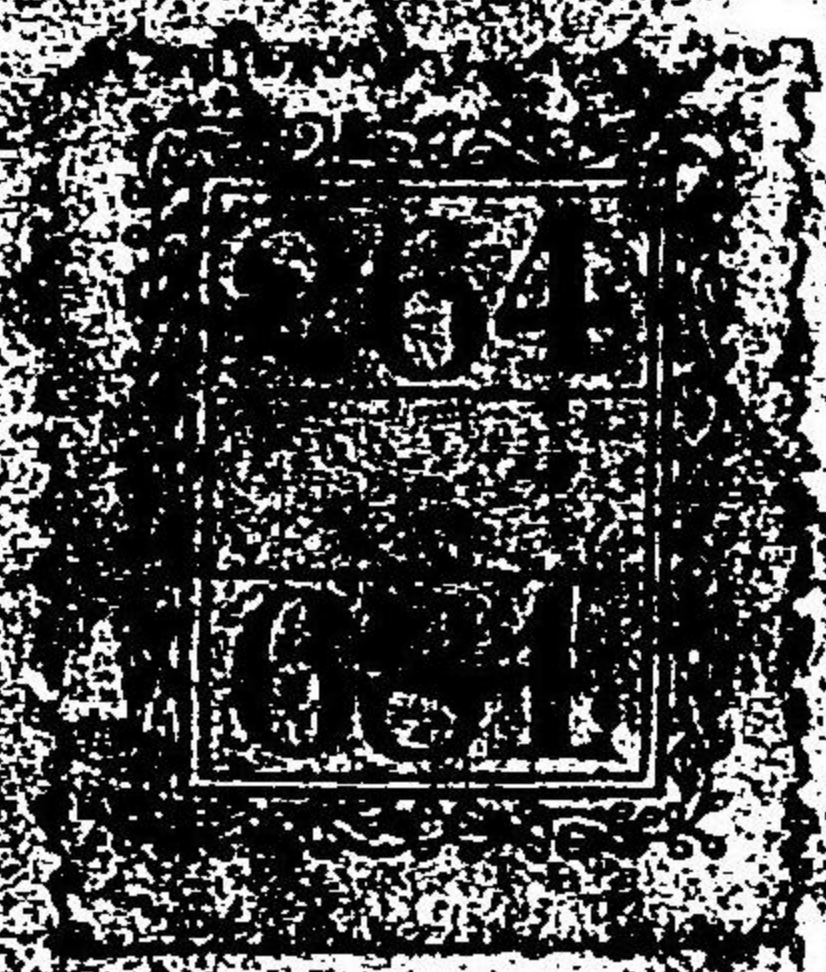


La faillite de la science.

學問之破產





第26  
第45  
147

La faillite de la science.

學

問之破産

本會負ドルツルドレゼー著

教學研鑽和佛協會藏版

44. 2. 9

寄贈

寄贈本

147



Journal of the Asiatic Society

本會館刊

卷之三

本會館刊

# 目次

## 緒論

第一章 科學の進歩は人をして益々幸福を享けしむるや……………三頁

科學進歩の前後時代に於ける勞働社會の比較  
女子勞働者、少年勞働者  
歐洲各國のポーペリズム  
高名なる社會學者の斷案

第二章 科學の進歩が社會道德を完全の域に導くや……………十七頁

青年者犯罪の統計



社會學者等の説

無道德教育

教育の宗教に對する局外的態度

社會一般の品行

進化學者の實驗

科學一般の傾向

ロンブロンの説

### 第三章 科學の進歩が事物の眞偽に明確

の解決を與ふるや……………三十九頁

ペルトローの説

實驗學も亦た形而上より出ること

天文學の例

實驗學の進歩に因て神秘奧義は益々増加せること

凡ての實驗學の根本

物理學上に於けるダイマテリアリザシオン

機械學の例

近世幾何學

博物學上の種類といふこと

避雷針

### 結

### 論

……………六十六頁

樂觀的見解

悲觀的見解

中庸的見解

孰れが合理なりや



孰れが高尙なりや  
孰れが幸福なりや

以上



# 學問の破産

緒論

ドルワールド・レゼー著

凡十九世紀の中頃より實驗學の遽かに歩を進むるや、一般唯物主義の學者は靡然として科學の進歩が能社會の不秩序不徳義紛擾缺陷災禍等の悉々くを改善し得べしとなせり、此時に當りて文學者ブルンチエル氏が「世人は實驗學に斯の如き重望を囑したりしも、其進歩は却て其目的を逸せしめたり、學術は實に破産したるものといふべし」と絶叫して世論を沸騰せしめたるは軌近のことなり、本世紀の如く唯物的社會に於ては、氏の斯の如き飾り氣なき露骨の論が近代實驗學に蕩けたる世人を憤激せしむること素より然るべきことなり、さりながら吾人が感情と偏執とを



避け極めて公平に思考せば、ブ氏の此言の當否果して如何なるべきや。實驗學の進歩や實に底止する所なく、將來益激甚を加へ、商工業に著大の關係ある珍奇なる發明尠からざれば、這般の問題は社會將來のために最も切要のものたらずんば、あらず、ブ氏の言果して眞實ならば、學術の進歩も、激しきは社會の將來に取りて案じらるべきことなり、又若し之に反して、其言果して不當ならば、社會は愈々完全繁盛に進むべければ、吾人は大に意を安ずべきことのみならず、大に慶賀せざるべからざる事なりとす。吾人が此問題を講究せんとすれば、須らく左の三つの關係を考ふべし。

第一 實驗學の進歩に隨つて人類は果して益々幸福を享受し得らるべきや

第二 實驗學の進歩に隨つて人類の道徳が愈々完全の域に到達し得らるべきや

第三 實驗學の進歩に隨つて事物の眞を明確に認識し得らるべきや

といふこと、是なり、吾人は今此の三項によりて、逐次本問題を解決せんと欲するなり。

### 第一章 實驗學の進歩が吾人に

#### 幸福を享受せしむるや

人は常にいふ理化學、器械學の發明に依りて、社會の交通、國民の生活、工業の發達等に著しき變動を興へ、幾と社會の革命の如しと然り、然に然りなれども、之が爲に會て之あらざりし所の社會問題の新たに生産し來れるもの甚だ多し、是等諸問題の中先以て一般國民の生活問題は如何、往時の生活に比して、甚だ平易に且つ幸福に進みしや、是極めて社會のため切實なる眞面目の實際問題なりとす。

吾人は此問題を論ずるに當りて、専ら英、佛、獨、米諸國の狀態によりて研究し、日本國は暫ら除外すべし、日本國は歐米各國に異り、僅々四十年前より



諸多發明の結果が影響し始めたるものなれば未だ明かに其影響の如何を顧すに至らず然も其結果は既に多少頭を擡げ始たるが如し否歐米も同じく社會問題の湧起し始めたるは事實なりされば日本の將來に於ても茲に幾年をか経過せば必ずや歐米と等しく其結果は随分激烈なるべきこと疑ひなし

此問題を解決せんには多少たりとも舊時代と新時代とを比較せざるべからず舊時代即ち約百年前までは大工業大製造業は極めて少くして幾んど之無かりし之に反して小工業小製作業は却て甚だ隆なりき工業といふも實は居職人にして各自皆其自宅に於て勞働製作せるなり而て又各工業者は其種類によりて其々組合を組織し相互に援助し救護し合て居りたり

斯る状態より來れる結果として第一富は平均して大富豪も現はれず少り迎又貧困者も少かりき第二生活の不平均少きがゆゑに各自其分に安

じて祖先の職業を繼承するが一般の風を成し故らに富豪出世の大望を有するもの極めて少し第三隨て地方のものは各土着に甘じて安かに都會に出るものなく爲に都會の膨脹は甚しからざりき第四斯く小工業者に分れて立てるがゆゑに多數の職工勞働者に對する誘道者煽動者の如きものなく隨て社會問題は起らず僅かに地方々々の一局部問題の存するに過ぎざりき人民は概して祖先傳來の儘に生活し現今の如く凡ての國に於て人民の棲息が或局部に集中するといふが如き弊あらざりしなり現時の状態は舊時に反して小工業者は大工業家に吸収せられ小商店は大商店に壓倒せられ所謂居職者の數は日々に減じて被雇勞働者職工は益々増殖つゝあるなり懼るべき社會問題の湧起は主として之が爲めならずんばあらず彼の大工業の勃興より來るべき必然の結果として先づ家庭生活の趣味を没了せらる何となれば大製造所が壯丁のみを雇使するときは賃銀嵩むべく又何れの製造所に於ても女子の力に堪ふべき



業務必ず有り故に經濟上女子労働者を雇ふ此故に苟も製造工業場の設立ある國々に於て女工のあらざるは益増殖しつゝあるなり全歐州に於て女工の數は男工數の約百分の三十を占む而て是等女工が悉く獨身者のみにはあらず中には夫あり兒女あるもの甚だ少しとせず尙又製造所は女工のみならず少年なる労働者を使役す獨逸に名高きケットレル氏は其著「労働問題」といふ書の十章に記述して曰く  
吾人は自ら欺くこと勿れ凡労働社會即國民の多數は自己と其妻子眷族の日々の糧を社會供給と需要の變動に全く左右せられつゝあるものなり予は思ふ斯る生活をなすより悲痛のことはあらざるべしと自己一身のみならず其最愛の妻子までが外國貿易の運命に其生命を支配せらるゝ労働者は如何なる感を爲すならん？眞實にいへば夙に開明に進みたる歐羅巴が一面には奴隷賣買の市場なり而て之が無宗教によりて腐敗せられたる文明の狀態なりと

嗚呼彼等労働者の家庭や晨に星を戴いて出で夕に月を踏で歸る其父や母や終日家に居ることなく其家に歸るも一日の労働に身体綿の如く幾に晩の疎餐に饑を凌げば直に寢に就く他何の望む所なし睡眠が彼等唯一の樂天地なり一家團圓の歡樂は彼等が一歳中にも殆んど罕に得る所なり斯る境遇に何の育兒何の教育が行はれん是れ取も直さず家庭の生活を蒸氣機關に潰されたものならずや  
配偶者ある婦女の職工として労働することに就ては多くの社會學者が論ずる所なり中にも無宗教なる歴史家ミシユレ氏はいふ  
労働女工とは如何に忌はしき如何に殘忍なる語なるよ十九世紀の工業が未だ斯く開けざりしまでは如何に野蠻時代にも解し得られざりし語なりき如何に古代の蠻語にも搜出得られざる語なり人類の半數を占る家庭を産出す母たるはと貴まるべき婦人を斯まで汚瀆する不潔な語の存せむよりは寧ろ總ての商工業の進歩なきに如すと



身体と精神との健康のために製造工場に於ける労働は、大害なるものなし、農業が如何に辛勞なるも時ありて休息す、殊に農業労働は野外に新鮮なる空気を呼吸しつゝするものにして、製造工場の如く腐敗せる悪臭ある煤煙塵埃の充滿せる濁氣中に労働すると同日の比にあらざるなり、此故に労働女工は漸次其生殖力を減殺す、若し然らざるも其生兒は多く尙、體的体格を遺傳す、斯る弱性の子女は成年に達するるとき概ね肺病に罹り易きこと各國の統計が示す所の事實なり、総ての社會學者がいはる如く、農業は健康に適するものにして、製造工場に労働するは却て健康を損ずるものなり、又多數の醫師等は人の身長一般に低くなりたる原由は種々あるべしと雖も、製造工場に於ける過度の労働が主なる原由の一なりと考へ居れり、  
配偶者ある婦女の労働よりも更に哀むべく憐むべき過當の有害なることは少年の労働なり、而も男兒のみならず、女兒まで之に従事せり、晩近の

統計表を見るに、獨逸國に於て十四歳より十六歳までの少女労働者が九萬八千六百六十四名あり、近代の社會學者道徳論者等は昔時の奴隸制度を論じて無道とし、野蠻とし、人類の位置を無視し、蹂躪するものなりと絶叫し、憤激しつゝあり、然れども近代に於ける何百萬の職工労働者特に女子少童の労働者に至りては、事實に於て製造工場の奴隸にあらずして何ぞや、右のクントレル氏は「製造工場の少年労働者」と題せる書に記して曰く、

製造工場に於て少年者の労働することは近代の殘虐なり、十九世紀に於ける一大汚辱なり、是れ實に少年の心身を二つながら漸々殺すの、乃至に等し、些少の金錢を得んがために彼の可憐なる小さな人間の健康と道徳と娛樂と將來の生命とを擧て犠牲に供るものなり、ア、蒸氣と鐵に於ける世紀の外決して行ひ得られざるべき不義のことなりと、  
短激に失するの感あるも、豈肯禁に中らずとせむや、而も社會學者の多



一〇  
數は曰ふ彼等は強て雇入ものにあらず彼等自ら任意に服するものなり  
賃銀の低廉なるも彼等が甘ずる所にして勞働するも否ざるも全く彼等  
の自由に屬すと而て高名なる社會學者ルブレイ氏が之に答へて曰く  
彼等が勞働するは其自由なりといふは恰も彼等が餓死するは其自由  
なりといふに同じ如何となれば近代課税は益々多く人民の負擔愈々  
重し食塩砂糖の如き日常生活に必須のものまでも税を課し爲に一般  
生活の困難は層一層を加へたり此故に餓死せむよりは寧如何なる無  
理過當の勞働なりとも甘じて之に服するに如かずと爲すが故なり之  
をしも彼等の自由といはぶ山野にある動物の自由よりも更に劣等な  
るものなるべしと

近代まで最も獨立にして且つ安穩なりし職業を視よ製造工場の特典さ  
る以前農民は自ら田畑を耕して得たる收穫を以て安全に生計を營み得  
たるにあらずや而も今日に於ては其作得は之を四分せらる即ち一部は  
税に一部は地代に一部は肥料に殘餘の一部を以て自己の收穫とするに  
過ぎず之を以て今日の農業は工業に劣り最早其口を糊する能はずとは  
人の常にいふ所なり

農業が斯の如く職工も亦た前陳の如し否更に農業よりも甚しく家庭的  
生活までも奪はれたり加之ならず彼等若身體健全なれば辛ども其生計  
を維持し得べしと雖も一旦病魔の犯す所とならば其狀況に悲惨にして  
常に貧困といふことのみならず三食にさへ差問ゆるの厄難に遭遇さる  
べからず又彼等が日々孜孜として其身を委ぬる工業其ものは世の所謂  
景氣と共に浮沈し物價の高下に直接影響せらるゝこと多大なれば若し  
も製造工場にして收支償はざるの故を以て一時閉鎖するが如き事あら  
んか彼等は忽ち其職を失ひ糊口に窮して浪々の身たらざるを得ず實に  
近代の勞働者は僅に今日を送るのみにして明日は如何に成行か測れざ  
るものなり是が近代に於ける實驗學進歩の結果なり尙其結果の顯然だ



る當眼の事實を知んと欲せば請ふパリ、ロンドン、ベルリン等の大都會の  
状態を注視せよ遊覽的旅客の目には單に其美麗なること繁榮なること  
清潔なること富裕なることのみ映じて世界の大都會たることに驚嘆し  
て止ん而も是れ其皮相のみ眩惑のみ是等都會に於ける下層に眼を低よ  
宿るに家なく夜々河橋の下建築場等に野犬の如く露宿する貧民否乞食  
輩は少くとも四萬を下らざるべし是等數萬の徒は旦に太陽の朝するあ  
るも働くに職なく食に物なく泛々として漂泊しつゝ其食を得に吸々た  
るなり而も是等の徒輩中悉々く廢人文育の者のみならず中には醫師あ  
り工業家あり辯護士あり教師あり技師あるなり稀には博士の肩書を有  
するものさへも混することあり彼等は生活の失敗者と稱せらる此等の  
失敗者が獨り商工業の競争激甚なるより來れる労働者のみならず今日  
に於ては博士教師技師等の知識を以て働くものにもまでも波及せるなり  
斯る社會的生存競争は凡百年前未だ實驗學の進歩せざりし時代には會

て見ることあらざりし社會の擾亂なり今日に於ける貧究の辛酸は餘り  
に甚しくして之を表明するため今日迄用ひ來れる言語は意味薄弱に  
過ぐ此故に數十年前より此甚しき貧困を稱するに Pauperisme なる言語を  
以てするに至れり

吾人が右に悲める所は決して吾人一己の觀のみにあらず近代の社會問  
題に對する學者等の論ずる所を視よ

米國の經濟學者ケイルノ氏は曰く

現今に於ける工業狀況に於ては富者は益々富貧民は愈々貧しかるべ  
しといふことは社會上の規則なることを明白に示すに至れりと  
實に其言の如し而て社會は何れに往も何れの時代にありても富者の數  
は少くして貧民の數は多し社會の大多數は貧民の占むる所なりされば  
右の如き社會上の規則は一面よりいへば一般の人民が日を追て益々困  
難なるべしといふに歸着するなり



合衆國に著名の社會學者ヘンリー・シエオルヂユ氏は曰く  
 之を告白することは最も悲痛に堪ざる所なれども、明白にいへば商工  
 業の隆昌なる都會が毫も貧民を減ずるの傾向を有せず、毫も労働者の  
 重荷を軽くするの傾向を有せず、却つて益生存競争の度を激烈ならし  
 む、製造工場に於ては可憐なる少童までに労働苦役を強、而も普通労働  
 者は益貧困に陥るなり、合衆國に於て貧民が其貧さより餘儀なくせら  
 る、所の不潔、不衛生、疾病、惡徳、邪欲、罪惡等を増加せしむる所は何れぞ  
 といふに、商工業の進歩によりて商工業地となりたる村落の都會に化  
 せる所なり、職工労働者其他一般下層民の大困難を最も表現せる所は  
 合衆國中最も繁榮なる州、富たる都會なりと  
 斯る大困難の將來が如何なるべきやを知らんと欲せば、請特に有名なる  
 社會學者マコーレイ氏の言に聽け  
 全世界の労働者は大なる貧究困難によりて暴動者となるべし、彼等社

會黨の主張なる或一二の者が數百萬の資産を有し、社會の大多數民が  
 衣食にも究するほかに貧しきことは人道を害するの罪惡なりとの言  
 を聽ば、大に歡むで賛同すべし、故に將來に於て饑渴に迫れる究民は狂  
 暴する豺狼の如くに資産家を攻撃し、掠奪を恣にするならん、此の掠奪  
 によりて社會は益大困難を増し之がためには更に他の新しき掠奪を  
 生せん、此時に當てや或はナポレオンは起つて權利を強奪し、一時各國  
 民を蹂躪するあらん、或は五世紀の頃羅馬が野蠻人の侵入により、奪略  
 せられたるが如く、開明せる各國が二十世紀の蠻人たる労働者の犯す  
 所となり、奪略を恣にせらるゝならん  
 右種々記述したる所を讀で吾人は如何に之を考ふべきや、實驗學の進歩  
 其珍奇なる發明を擧て悉く之を排斥すべきや、否々決して然らず、其進歩  
 は人智の力を極めて立派に表明するものなるがゆゑに、吾人々類のため  
 に最も名譽なることなり、尙又失あれば得もあるなり、其進歩は多くの疾



病を治し、國々の交通を容易にし、世界各國が漸次開明に進む等、其結果は大なる利益を興ふ、此故に明晰なる智識を有する人々は、實驗學の進歩を見て、感嘆喜悅して之を賞賛すると雖も、然も此實驗學を以て社會の缺點、其困難究乏等が漸次に癒され、一般人民の生活が益安樂に幸福に至べしとは、信せざるなり、斯る嚮望は社會の實際状態に合はざるがゆゑに、若し斯る結論を取るものあらば、それは實驗學進歩の光輝にのみ眩惑して、其眼光が暗所に到徹せざるか、さなくば辯護士的小説家的の形容修飾の辭を好むもの、稱する所のみ、眞面目なる人の眼より視ば、ケイルノ氏のいへるが如く、現今工業の形勢は少數なる富者をして益富しめ、却て多數の貧民を愈貧からしむるなり、即ち物質的開明に進める國々の一般人民は、將來益不幸に困難に陥るべしといふの結論は、瞭然疑ふべからざるなり



## 第二章

### 實驗學の進歩は人類社會の道

徳を益々完全に進ましむるや

此問題の大体を知んと欲せば、日々發刊する所の新聞の三面に眼を晒さば、足り如何なる時代にも、殺人、偷盜、私生兒、自殺等の罪惡行はれざることをなし、然れども、實驗學の發明によりて、物質的文明の進歩するに従ひ、罪惡の行はるゝこと愈増加し、社會は一般に腐敗の空氣に充され、上流の人も下層の民も、益道德に遠り行つことは、明かに表現しつゝあるなり、而て或國民に行はるゝ所の道德の程度を知るに、極めて容易なる方法一つあり、他なし、其國青年の品行と、學校教育とを觀察すること、是なり、此二者の者を觀以て、其國の輿論或は一般の民心を察知し得べし、文明諸國に於ては、裁判所若くは監獄に於ける統計を見れば、青年者の犯せる罪惡は如何ほど多きか、如何なる種類の罪なるかは、直ちに知り得べし、而て先づ青



青年犯  
罪者の  
統計

年者の犯罪が六七十年前に比して増減如何吾人は多くの統計表を引用するの煩を避特に一個國のみを擧げん蓋し各國大同小異に過ぎれば之を以て類推し得るを以てなり佛國政府の公けにせる統計を視に十六歳より廿一歳までの青年の過去に於ける犯罪數左の如し

千八百三十年に於ける	過去十ヶ年間の 毎年平均犯罪數	六九七九
千八百四十年に於ける	同	九〇一八
千八百五十年に於ける	同	一三九一〇
千八百六十年に於ける	同	一八五七二
千八百七十年に於ける	同	一九五八四
千八百八十年に於ける	同	二三三一九
千八百九十年に於ける	同	二七三〇九
千九百年に於ける	同	三〇四八五
千九百五年に於ける	過去五ヶ年間の 毎年平均犯罪數	三一四四一

此の數字の示す所に依れば七十五年間に百分の四百五十の割合に青年犯罪者の數を増加せるなり而て是等の犯罪の種類は主に創傷殺害なりき豈恐るべきことならずや千八百三十八年に於ては刑法に處せらるべき犯罪者の數は十萬人に對する僅に二百三十七人なりしが千八百八十八年に至りては十萬人に對する五百五十二人に増加せり社會學者フエレ氏が「衰微と重罪」と題せる著書の八十七頁に記して曰く「重罪犯者と發狂者どが物質的文明の進歩するに従つて増加することは確實なり智育といふことは重罪犯者を増加することの豫防たらず道徳に就ての智育の結果は唯一つのみ即ち人民の感情と希望とを増大せることは是なり」と又自殺者の數を増せることも五十年間に百分の六十二なり社會學者リシエー氏著「百年後」の六十一頁に記して曰く「自殺者の多きことは頗る完全なる物質的文明の結果なり物質的文明の完全に至るに従つて自殺者の數を減すべしと思惟は不可なり却て益増加すべきこと疑ひなければ



なり」と又其六十五頁に結論していふ「道德的進歩を得るために物質的進歩に信頼せんとするの考は空想に止る是に等しく實驗學を以て人民の道德を進めんとするの希望も亦空想のみ」と

國に依て犯罪者の數に多少はあるも物質的文明の進歩したる國にありては皆等しく青年者が益悖德不正汚行に進めり而て是等青年者の行狀が其受たる教育の結果なりとせば彼等の行狀が直ちに其國に行はるゝ道德の驗温器たるなからんや

然らば其原因は何なるべきや疑なく物質的文明の進歩するに従つて一般の學校教育が無宗教主義となれるがゆゑなり即ち宗教的道德を排斥して之に代るに人為的の道德論を以てせるにあること疑ひなし極言すれば上は大學より下小學に至るまで德育は毫もなくして唯智育のみ存す而も其智育が亦た物質的智育のみなり讀者若吾人の言を疑はば請高名なる博士の左の所説を看よ

巴理府博士會員なるコンペイル氏が千九百八年六月一日刊行の「レヴェ」雜誌に現時小學教育の無道德を詳論して

現時の狀態を以て見れば大中學は勿論小學に至るまで益々無道德に向つて進み居れり近來道德起原説に就て新式解説は澤山現はれ或は遺傳説或は交際説或は人類尊敬説或は責任説或は社會將來の幸福説といふが如く殆ど毎年一新説を産出するかの觀あり然れども斯の如き勤勉は却て舊來の道德を益々破壊し去るのみなること疑なし如何となれば斯る多數なる説は各曖昧なる論式にして其相異れる説に眩惑せられ其孰れに歸すべきかを知る能はずして終に全然道德を委棄るに至るべし是れ一般國民のみならず文學者哲學者教育者までをも然らしむるなり彼等の中現に今日の不道德なることも明日道德となすに至るやも知るべからざるがゆゑに世に道德者は多くありとするも實際道德なるもの存するものにあらずと放言したるものありしに



あらずや

之に依て見るときは社會は總ての理想を棄、詭辯を弄し、思想の混亂せんとするの傾向は憂ふべきは甚しきに至れる者なり、而も其最も悲しく、恐るべきは其傾向の既に學校教育にまで傳染せる事なり、今教育書、教育雜誌等を播くに事、宗教に關するものは秋毫の微も故に之を忌避し、而て之に代に人の立たる道德を以てせり、されども斯の如き道德は物質的の進歩と革命とによりて變遷する者なるが故に、決して學問を以て見べからず、道德を以て稱すべからずして、是唯社會一片の義理たるのみ

尙更に悲むべきは學校に於て教べき道德は宗教に對しては全不偏不黨局外に中立すべしとは確焉不動の規則なるに、此規則を遵守する教師は寧ろ晨星の如く稀なり、世の教師先生等は自が贊せる學說と假定等を勝手に教授し居り、凡の教師は進化論の假定を是認するが故に是

が假定の説たる事は云すして直ちに疑ふべからざる學說として教授す、幼時より斯の如く教はられたる者が青年に達すれば其生國に行はるゝ世間の義理てふ事の他何ものをも信する能はざるならん、然れども此の義理てふ事は衣服の流行の如く隨時變遷するものなるが故に、斯る教育を施せる國に於ては終には根柢なき泛々たる心に隨て純無道德に陥るべきなりと

されば斯の如く教育は宗教に對して局外に中立すべきものなりといふ規則を案出せる政治家、教育家は人類自然の傾向を知らざるものなり、人間は其生來として同一地に靜止すること能はざるものなり、如何にしても進歩向上せざれば止まず、若し其踏込たる道が惡ければ益々其惡き方に傾向すべし、何かを破壊し始むれば全く之を破壊し盡さずんば止まざるの傾向を有す、而て彼の教育は宗教に對して中立たるべしといふものは其實宗教を必要視せずして、度外視するの謂なり、此故に宗教に對して



局外に立つときは如何しても逐次他の權利に對しても局外に立つの態度を取るに至るべし、即ち先づ政府君主の權利に對して局外に立ち愛國といふことに對して局外に立ち終には父母に對して局外に立つに至るべし、吾人の此結論は餘りに激なり、決して斯くまでに至るものにあらずと思惟する人は現時に最も開明せる各國の進歩を視よ、千九百七年に刊行せられたる「新教育の講義」に記して曰く

教育の目的が人をして正直ならしむるにありといはゞ、それは正直なることの如何なるものなるやを明かに知りたるに同じ、然れども正直とは何なるやを理解せる人ありや、實は理解せりと思へるのみにして其眞意を知らざるものなりと

又曰く

教育が中立すべきものならば兒童の精神的發達を碍ぐべからざるなり、吾人の教育によりて子が父母の抑壓を免るゝを得ば感謝すべきこと

とならずやと

此説の眞意は父母の權利は壓制なり、故に孝は善行にあらずして愚なることなりといふにあり、豈暴逆なる説ならずや、斯の如き父母の權を無し忠孝の道義を破却するの言をなすものが小學の教師にあらずして然も尋常師範學校のドュフレンヌといふ視學官なる教師なり、彼は其書の末尾に結論して曰く

從來教育家は道德教育に關して苦心したれども將來吾人は純無道德を以て教育すべく心懸くべし、而て斯の如く純無道德が一般に流行する時に當りて社會は如何になるべきか其習慣其義理其秩序等が如何に成行べきかと問ふものあらば、吾人は答へていはん是れ吾人の關する所にあらず社會が如何に成行もそは吾人の問ふ所にあらずと

斯る過激なる説を初めて耳にする人は、これ或は狂人の説ならんと思はるべし、其省察は勿論至當なれども、然も余輩が前述の言を忘却せられざ



らんことを望む、即ち余は前にいへり、社會は決して同一地點に靜止することなくして絶ず或方に進むものなりといふことを惡なりとも顛狂なりとも既に其方に傾向するならば益之に向つて歩を進むべし前掲新教育法講義なる書の如き五六十年前ならば決して公けにせらるべきものにあらず、而も今日は著書として公けにせらるゝのみならず、多くの人々に歡迎せらる、尙又斯の如き著述をなせる尋常師範の視學官教師たる人の耻辱にもならず、從て其職を免せらるゝが如きは更にあるべからざることなり

幸にして日本に於ては斯る過激なる狂愚なる説を公にすること能はずと思ふものあらば、其人は人間自然なる心情の傾向を解せざるものなり、今より三四十年前に於て日本の首府なる東京の市街に於て彼の顛狂者なる社會主義者が白晝公然旗を振て無政府を叫びつゝ通行するが如きことが果して有り得られたらんか、其頃なりせば彼等無法の徒の如きは

政府の手を待たずもなく激昂せる人民のために直ちに踏潰されたりしならん、而も今日は警察の外彼等無法の徒に抗するものは一人もなきなり、吾人は屢々繰返さん、社會は絶ず進み絶ず變るものなりと、社會は決して誠實なるに至らず却て益々横着になり往くなり、これ別に詳細なる例証を用ひざるも讀者は日々に新聞を讀るゝがゆゑに社會の様子は能く熟知せらるゝならん

活版術の未だ發明せられざる以前にありては假危険なる論背戻せる主義、不道德なる説惡摸範となる行爲等ありたりとするも、一般人民までが之を知ることは無かりき、懷疑主義、主理主義、唯物主義の如き、總ての理想を破壊して人心を濁亂する論の如きは、學問に従事する少數人の外決して知らざりし、又或上流の人に不品行あるも、惡行あるも今日の如く隅々までも知渡るほどの評判とはならざりしなり、尙又其當時にありては青年の春情を挑發し、人心を腐敗せしむるが如き小説も、春畫もなく、演劇も



亦た英雄豪傑の事跡ならずんば戦争談等のみにして戀愛に關すること等は極めて少かりき日本は例外とす然るに今日は活版術が完全に進みて新聞雜誌小説等極めて廉價に購ひ得られ電報通信の便によりて世界の距離は極めて接近せられて隣邦の如く或一國の醜行惡事は忽ち全世界に傳播せられ一般人民にまでも知渡るに至れり

現時の社會を瞥見するに上流の人は非望と利欲に充され下層の人は日に益す反目疾視に進めりこれ要するに社會の頭部より足部に至るまでが擧て崇拜する所のものは成功といふこと、金錢との二つの外なきがゆゑなり現社會に於ては清潔なる財産は極めて少し多數人の有する財産の根本に遡れば必ずや偷盜ならずんば收賄なり收賄ならずんば陰險手段を弄せる投機不正の暴利を占斷せる商業等に到達せざるは稀なり泰西に行る、俚言の如く是皆人民の血と涙とより出たる財産のみ斯る糞尿の如き不潔なる財産なるも之をさへ多く有すれば威風堂々として

世を渡り又下流の人民は其本心に之を嫉視し嫌惡するも表面には平伏し禮拜しつゝあるなり爵位を得んがため勳章を輝かさんがため代議士の椅子を占んがためには大官の足下勢力家の面前に匍匐し阿諛し官職地位を以て店頭商品の如く賣買するなり

現今の社會を主宰するの神は金錢なり金力を以てすれば如何なるものも購ひ得られざることなし勢力も光榮も社會の賞賛も金力の自由なり輿論を指導するはどの力ある新聞なり文士なり哲人なりにしてたとへ數百萬の金錢を積むども其筆の自由の前には些の力を有せずといふほどの氣骨あるもの幾何あるべきか

最近の文學書を視よ「ゾラ」の如く羞辱なる不潔なる小説が最も賣行多きにあらずや世に如何なる商業なりとも時として不景氣の嘆を免るゝこと能はず而も獨り不潔なる文學書のみは不景氣を知らざる特例を有する商品なり如何なる都府に於ても高潔なる婦人は書肆と繪畫店とは



足を入ること能はざるほどに淫猥なる書籍と繪畫とを店頭陳列せらるゝほど増加し來れり三四十年前までは決して斯ることあらざりき近時泰西に於て世に名を知るゝ多くの文學者等は離婚に賛成を表するのみならず自由戀愛の行はるゝやう鼓吹し居れり吾人は茲にナケマルダリント、ゾアラブリーグ、プリム等の文學者が筆にせるものを示さんと欲すれども讀者の眼を漬すに等きがゆるに之を省かん然し或者は吾人に反問せん近代文學書の不潔になれることは遺憾は遺憾なり憂ふべきは憂ふべきなり然れども是が實驗學の進歩に何等の關係を有せざるにあらずやと吾人は答へて曰はん社會は一個の人体の如し決して五体を分割する能はざるなり人体にありて其頭腦を損せば全體に關係を及ぼすべし社會も之に同じ社會の頭腦は智的學術なり其學術にして邪路に入り人類の位置を畜類同様に引下ぐれば社會は其文學も其習慣も其行動も漸々横振して不潔に墮落すべし公平誠實なる眼より視て今の凡て人性に關係を有する實驗學が人類を畜類同様に引下げ居らざるや進化論の稱ふる所によれば人類は萬物の靈たるものにはあらずして靈魂も具へざる完全なる動物なりとす其有する智識高尚なる感情其感ずる道義忠義孝道愛國の念の如きも尿が腎臟によりて分泌せらるゝが如く腦髓によりて分泌せらるゝといふが如き假定學説は之を以て人類を漬し自然の理想を破壊し惡念を抑制するの道を排斥し私慾を助長すべきこと明かならずや吾人と吾人が飼育せる狗との區別は單に腦髓重量の差のみと思ふに至らば吾人が生來に知る所の道徳も破却せられざらんと欲するも得べからざるにあらずや茲に至りては人は唯彼狗が鞭たれたる杖をのみ恐るゝが如く只警察と法律の外は何等恐るゝ所なきに至るべきなり

進化論が右の如き極端なる意味を有するものにあらずとするものは左に記す所を讀れよ



千九百七年巴理府マロアンヌ印刷會社より和蘭の博物學者ベルネロ、モ  
 エンス氏が著る「人類の起原に就ての實驗的研究」と題せる書を發行せり  
 該著の目的たる勿論其題目の如く人類が地球に生じたる起原を説明せ  
 んとするにあり、今其梗概を述んにヘツケル氏のいへるが如く(Primates  
 主長動物)中に於て下等の猿類より「ギンボン」を出だせり、此の「ギンボン」が  
 現今生存せる猩々ゴリラ、シンパンヂュの如き大なる猿類の祖なり、此  
 の大猿類より彼の有名なる「ピテカントロプ」出でたり、而て此の「ピテカ  
 ントロプ」こそ「ホモ、ステュピド」(Homo Stupidus)即ち愚なる人類の祖にして  
 是より現今の如き智識を有する人類を生ずるに至れるものなりとは最  
 も明白に論じたる所なり、而し此の進化系統を學術的に立證せんには猩  
 々類と所謂愚なる人類と名けたるものとの中間に存すべき彼の「ピテカ  
 ントロプ」なる珍しき猿類を發見せざるべからず、然れども不幸にして未  
 だ全世界の地層に於て如何に調査するも「ピテカントロプ」の化石の遺跡

だに見出し得られず、さりながら個は極めて容易ことなり、何ぞや他なし  
 「ピテカントロプ」を發見すること能はざるがゆゑに新たに之を造出する  
 なり、其方法は黒人と猿類との雜種を得るにあり、此の目的を以て氏は近  
 々「亞非利加」コンゴ國に出發すべし、同國にはゴリラ、シンパンヂュは多  
 く棲息せり、故に印度「マレーシア」等より猩々「ギンボン」を購入し之を以て  
 「亞非利加」に渡らば此實驗は極めて容易なりといふにあるなり  
 讀者よ此る實驗的研究を爲さんとせること實に暴戾なることならずや  
 人類たる吾人を畜類同様に引落すの學問ならずや、是が若し四五十年前  
 の社會ならば斯る没人道なる陋劣なる目的は輿論の激昂を惹起し其壓  
 迫のため到底發表し得べき言説にあらざりしならん、而も現時に於て  
 は斯る不道の説を聞も人々は憤激せざるのみならず却て此の公徳を無  
 みせる説に賛同するものさへあるなり、即ち或國の女皇と其皇婿と皇太  
 后とが之を奨勵するに至りたりとは豈驚くべきにあらずや、苟も國君た



るものが如何なる心を以て斯く公々然と人類の位置を辱めんとせるか  
社會の頭なるものが如何にして斯くまで人道に背反するか是實に社會  
は上流の人に至るまで其良心の稍横振し初たるの徴たらずんばあらず  
斯る没人道的惡摸範を下層の衆民に垂るゝに於ては社會は如何に成り  
行くべきかさなきだに政府と在野富豪と貧民場主と職工資本家と勞働  
者の衝突は日を追て激甚ならんとするの時に當て人民が人類の地位を  
尊敬し人道を重んずるの自然の心を破却せんとするは此上なき危險の  
ことならずや勿論右の如き實驗が全く科學に適ふの結果を得ば假令社  
會が云ふに忍びざる不道德に陥るも先以て口術はあるべけれども現今  
分明せる實驗學上の確固たる規則に背反せる研究なり如何となれば總  
ての生物學者が疑ひなしとせる一の規則は生物の種類は決して逆戻す  
るものにあらず生物の進化は決して運動の如く反對に變轉することあ  
るものにあらずといふ事なり細言すれば生物進化の假定を眞實とすれ

ば下等動物が進化して高等動物に變じこそすれ高等動物が退化して下  
等動物に變すべき筈なきなり且又諸多動物の雜種作製上實驗して明か  
に知れたる法則は同一種類若くは極めて近き種類の間にてのみ生産  
行はる尙馬と驢の如きは種類極めて近きがゆゑに其間に稀に繁殖する  
こともあれ也然も必ず二代より繼續するものにあらず是れ生物學上の  
確則なり「ダルグヰン」の如き進化論もこれに就ては疑ひを容ざる所なり  
之に依て見ときは現今の社會に流行せる實驗學は知す識す排哲學排宗  
教に傾向しつゝあるもの多くの實驗學者は公平なる心を以て萬物の現  
象を研究し全く事物の眞を知んとするものにあらずして從來の明白な  
る實驗に反するほど曲て唯物論を立證せんとするものなり眞正なる學  
問の性質は明かに立證せられたる學理のみを確信し立證の不充分なる  
ことは疑はしき學理とするなり故に假定の學説は何處までも之を假定  
とす斯く考ふるこそ眞正の學問なり眞面目なる誠實なる學問は總て皆



斯の如し、然るに現今に於ける多數の實驗學者は之に反して、靈的存在の  
確証は自儘に之を排棄し、確證なき唯物論は輒ち之を確信す、又或は進化  
論の如き假定の學說を以て確證として授け、或は自己の贊せる學說に障  
害ある論理學形而上學の如きは想像上の存在にして實際に存すべきも  
のにあらすと教ゆ、斯る行爲は不誠實なるのみならず實驗學の性質たる  
法則にも背くものなり、而も此の無學的なる行爲が一般の傾向となれり  
此傾向は新聞雜誌小説にも、小中大學に於ける教育にも明かに顯現せる  
がゆゑに次第に一般人民にまで波及せるなり、斯る風潮の直接の結果は  
何ぞ他なし、一般人民が物質の他、何物をも認めざるに至れり、畜類と同様  
なる人類は之を尊重せず、政府君主の如き權勢あるものを尊敬せず、凡て  
の權利は之を排棄せんと欲するに至る、是素より當然のことなり、上の好  
む所下焉んが之を欲せざらん、下流が上流に貧民が富者に無學者が學者  
に傲ふ、毫も不可思議とし、奇異とするに足らざるなり、されば今日に於て

國民が尊敬心嫉妬邪欲を抑制するの宗教法を失ひて、亂暴に流れ、動もす  
れば同盟罷工をなし、社會黨と共產主義の蔓延する等、是亦た重も異とす  
るに足らず、當然の結果といふべきなり。  
斯の如く、唯物論實驗論自然主義等に由て腐敗せしめられたる學問は、理  
化學生物學等の如き物質を研究する學科のみならず、道德感情智識法律  
等の如く五官のみを以て觸能はざる研究する能はざる問題に就てまで  
も腐敗せしめられたり、彼の近年有名となりたる以太利の法學家ロソフ  
の「ロソフ」の説を聽け、彼は論じていふ、人間は其生來に眞正に自由を有するも  
のにあらす、人が正直なるか不正直なるか、善人なるか悪人なるかは共に  
之れ其祖先よりの間竭遺傳の法則に因ものなり、されば放火殺人等の如  
き重大なる罪を犯すも實際其人間が其罪惡の責任を負ふべきものにあ  
らず、人の善惡といふことは間竭遺傳的の現象にして、人の惡を爲罪を犯  
す、危險なる癖あるなどは是唯一種の病的行爲のみ、簡言すれば社會に罪



人はなく唯病者の存することのみ、此故に刑法は背理のことにして、須らく死刑は勿論懲罰も共に廢止すべきものなり而て肉体の患者を病院に收容する如く、是等精神的患者なる罪人を收容するに監獄を以てせず、病院を以てすべきなり云々

斯く人の自由と其責任を全く無視するの法律學は、人を畜類同様に下落せしめ、社會の秩序を根本より打破し盡すものにあらずして何ぞや、而も斯る立論をなせる「ロンプロゾ」は、彪大なる著書をなし、泰西諸國に噴々たる好評を得之を賛成する學者も、多く新聞に雜誌に之を掲載して、勞動者の如き下層の人民にまで、普く之を知らしむるに至れり

以上述たる種々なる事實より推究すれば、實驗學の一般の傾向は、道徳を無視するにあり、而も此傾向は、決して薄らぐことなく、却て益々唯物的に進歩するが如し、此に於て實驗學の進歩は、人民の道徳を益々完全の域に達せしむべしといふ説は、憐むべき盲目論なりと斷定せざるを得ず

### 第三章 化學の進歩は愈々事物の眞

を明かに認めしむるを得や

近時の社會に於て流行し來れる論議學說等は、頗る曖昧に流れ、深玄なる學理のみならず、其初步までも實際の意義を失へるに至れり、而も斯る曖昧なる智識を有するものが、無學無識の徒にあらずして、世に博學宏識を以て稱せらるゝものにまで多くあるに至れり、視よ社會多數の學者等は、形而上學と抽象的思想とを認識すべからざることを、として之を排棄し、科學には吾人が知る能はざる神秘的奧義といふが如きものは、漸次解決せらるゝに至るべしと呼號するにあらずや

昨千九百八年死去したる巴理の高名なる化學者、ペルトロ氏は、千八百九十五年二月刊行の「レヴュー」ド、パリ「雜誌」に論じていふ、神秘玄義なる言語は、現時の科學的言語と方式中より除外せられたり」と、蓋其意は科學を以



て解決せられたることは今日迄甚だ多く、尙將來に於て漸次悉く解決せらるべしといふにあるなり  
 然しながら凡如何なる現象に於ても其根本にありては決して知り得べからざる奥義玄理の存するものなり、凡百の學問は皆此の奥義玄理の上に立ちつゝあるなり、彼のペルトロー氏の如き大化學者が如何にして斯る曖昧なる誤謬に陥りしか、彼は實に驚訝に堪ざるほどの學問的撞着をなせるものなり、斯る大學者にして既に然り況や平凡の學者尙況や總ての學生等が流行せる論説を深く考察するの暇なく、同じく撞着に陥り易き寧ろ當然のことといふべきなり  
 以上陳たる如く、現今に於て大に流行せる誤謬は二つにして、一は形而上的方式は専ら抽象と奥義玄理の上に立つものなるがゆゑに、科學的方式といふべからざるものにして無益のものなりといふこと、二は實驗學は之に反して抽象と奥義は之を排棄し、専ら具体と明確なる現象のみの上

實驗學  
も形而上より  
出づ

に立てるものなるがゆゑに、明晰に認識し得る學問なりといふにあり、此の二個の誤謬に由りて、智識の横振せる學者と、上流の人々どが社會に如何に多く存するか知るべからず  
 然れども、眞實にいへば、全く之に反して、實驗學も亦た皆抽象と奥義の上、に立てられたる形而上學より出るものなり、形而上といふことを排除しては、凡百の學問所謂實驗學までも存立する能はざるなり、且又實驗學といふても決して悉く明晰に知り得らるゝ學問にあらず、却て此學の進歩するに隨ひ、神秘奥義は愈増加すべきなり、吾人が之より逐次證論する所を視よ

第一 實驗學も亦形而上より出るものなり

吾人が斯く云はば、人或は之を怪まんなれども、是極めて立證し易し、カール博士は其著「第一原因」と題せる書の九頁に記して曰く  
 「科學は眞實にいへば、吾人の識得したる所を組織的に綜合したるに



過す、而て識得したることを組織的に綜合するとは、共同の原則に従つて総て知り得たる所の問題を集合する或は連繼することとなり、而て又此共同なる原則をも集合して、尙之を共通の原則に約めることとなり、換言せば夥しき具体的現象を成得る限り少き抽象的原則に變ずることにして終には多くの原則をも悉く唯一の共通なる原則に省約するなり、一言以て之を蔽へば多様の事柄を一致せしむることなり、科學は斯く一致するに隨つて益々完全に達したるものとす、而て斯く唯一の原則にまで要約し得たりとて、之を以て玄理奧義までも解釋し得たるものと爲すべからず、此奧義なる超越せる抽象は如何にしても解し得られざるものなりと

博士のいふ所は、他言を以ていへば、或出來事或現象は具体なれども、其理由其原因を説明することは抽象に屬するものなりといふにあり、而て抽象とは取も直さず形而上なり、之極めて明白なることならずや、解し易き

例を擧んか、今日まで非常の進歩をなしたる實驗學は星學なり、而て星學は如何様にして科學たるに至りしや、十七世紀に至るまでガリレー、ニュートン、チコブラへの如き高名なる學者數氏ありしと雖も、未だ以て一科學を爲すに至らざりき、如何となれば、此時代まで知り得たることは、實見したる多くの出來事、或は現象の雜駁なる集合に過ぎりしものなればなり、即ち特にチコブラへの如きは多くの行星の毎夕現はるゝ所の位置、其運動、其速力、其方向等を觀測して之を精密に記述したり、然れども是れ其觀測せる多くのこと、目録書たるに過す、其運轉の原因、其規則等は毫も知らずして、未だ一の星學的元則はあらざりしなり、然るに十七世紀の始にケプレル氏は彼の觀測せる雜駁なる集合を一々比較し、商量し、是等の多くのことの間を連繫し、行星の総ての運動は楕圓の軌道をなすといふ一の概則を知り得たり、是れ多くの觀測事實を概括せるものにして、科學的形式を成し始めたるものなり、要するに右チコブラへの氏の實



験は科學の材料たるべき具體的出來事のみなりしをケプレル氏が概括  
 といふ抽象方によりて科學的に説明したるものなり、されば星學も抽象  
 なる原因に由りてケプレル氏以來に組織せられたるものならずや、然れ  
 どもケプレル氏の此説明は未だ其範圍極めて狹隘にして行星運動の軌  
 道のみに関係することなりき、其宇宙萬有との關係も又其運動の原因も  
 知らざるがゆゑに過去に比しては非常の進歩といふを得べきも不完全  
 たるを免れず、斯く狹隘にして不完全なるも原則なるがゆゑに此時より  
 天体の觀測が天文學を形成せりといふを妨げざるなり  
 十七世紀の終りに當てニュートン氏はケプレル氏が發見したる原則を  
 擴張して更に概括せり、即林檎の地に落るといふ卑近なる現象を基本に  
 此の林檎を落すの重力も行星に楕圓運動をなさしむる力も同一のもの  
 たるへしと考定し、之を引力と名けたり、是れ即ち林檎の如く地球表面に  
 総ての物体の墜落するといふ具體の現象と行星の楕圓運動の觀測を合

一して共通の規則内に入れたるものにして、多様のものを完全に概括し  
 たるに同じ、総ての科學は皆斯の如し、今耳に聽所の種々の音響なる具體  
 現象も、其原因は空氣の波動なりとせる原則を立てたるは、是れ総ての個  
 々なる音響といふ具體現象を概括せるものなり、又眼に映する光線、身体  
 に感ずる熱は皆是れ「エーテル」の波動に基くものなりといふも同じく其  
 等具體現象を概括したるものなり  
 斯種々なる出來事現象を漸々総合して一科の學術を形成するは皆是れ  
 概括の作用にして是なくんば科學たる能はざるなり、單に雜駁なる事の  
 集合たるに過す、而て又斯概括するといふ能働は實驗的にあらずして全  
 く抽象的能働に屬するものなれば形而上のことなること勿論なり、是れ  
 疑ふべからざる眞理ならずや  
 凡そ有る所の原則、學理、組織、概括などいふことは有形に實在するものに  
 あらず、只吾人の意識内に於てのみ存在する所の概念なり、例へば吾人の



有する生命なる概念は決して實在するものにあらず、世には生活せる個々なる生物の存するあるのみ、又人類なる概念は存すれども實在に於ては生活しつゝある約十六億五千萬の個々なる人間の存するのみ、引力なる概念も亦た同じ、相互に牽引する所の無数の星、晨行星、彗星の存するのみにして、其實在はあらざるなり、総て皆斯の如く概念概括なといふことは形を有するものにあらずして、唯抽象的思想即ち形而上に屬するものなり

紀元一千九百七年に於て巴理府博士會員にして理科大學長と佛國學術獎勵會々長なるポロロ、アッペール氏はクレルモンブエラン市に於て演説して曰く

學問とは抽象に外ならず、而て抽象とは學問を研究するもの、智識學問を適用する技術家の智識學問を教授するもの、智識學問を勉強しつゝある學生の智識のみに存在するものなりと

されば形而上のことは實驗し得られざるがゆゑに學問にあらずとか、實驗學は形而上學に關係を有せざるがゆゑに眞正の學問なりなどいふ説を稱するものは學問の定義其性質等を知らざるものなり、斯智識の暗しなる先生方の多きは豈憚むべきことならずや

第二實驗學の進歩に従つて神秘奧義は果眞て益減すべきや

以上論ずる如く實驗學は形而上學に反して明かに知り得らるゝ學問なり、殊に又彼のペルトロー氏がいへりし如く實驗學の進歩に従つて神秘奧義の如きものは全く存せざるに至るべしといふ説は近來非常に流行するに至れり

然れども是れ大なる誤謬なり、實驗學の進歩によりて未知れざりし奧義が減することは決して之あらざるなり、否却て其進歩によりて解し得られざる事増加せり、到底知り得られざる所は愈々多く愈々深くなるべきなり、是實に眼に睹はざるに顯著なることなり



先第一に凡そ有ゆる學問は解し得べからざる出來事或は現象を知らんとするより生ずるものなり、即ち學問の原因なる大原則は到底説明し得られざるものなり、例ば理學は力を化學は化合力を機械學は運動を天文學は引力を生物學は生命を根原として探研するもの、一言以て之を蔽へば、凡ての實驗學は物質を根元として探究するものなり、然れども是皆深玄幽妙なる到達し能はざる奧義にあらざるや、物質は如何なる性質のものなるか、毫も知ること能はず、後章にも述ぶが如く二三年前博士ルボン氏が物質の性質に就て立てたる新學説は學術的革命の如きものなり、力生命等も亦た物質と同じく毫も知る能はず、スペンセル氏も曰く「力なるものは智識を狼狽せしむる奧義の奧義なり」と、吾人は又生理學書を繕いて見るも、生命の定義は未だ何れの書にも讀たることなし、吾人は生物の如何なるものかといふことを知り居れども、生命の性質に至りては奧義にして何を言ふ能はず、睡眠といふ種かて普

通の現象までに就て之あると之なきとは能く辨別し得るも、其性質は毫も知らず、此故に睡眠の明確なる定義は未だ之あらざるなり、之に依りて見るときは如何なる實驗學も奧義を有し、奧義の上に立ものなることは疑ひなし、さればにや右のポロ、アンペールの演説にいへり

眞正の學術的精神有るものは謙遜と用意周到なり、如何となれば學術の眞は相對的なればなり、又眞正の學者は事物の内狀は知るべからざる奧義なることを知り居るがゆゑなりと

次には尙是のみならず實驗學の珍奇なる發明あるに従ひて愈々新なる他の奧義を増加す、實驗學の進歩即ち所謂概括の進むに従つて解し得べからざる問題は殖行べし、僅々五十年前の大學者等は微少も思ひ及ばざりしほどの驚く可き深立なる新奧義は夥しく増加せり、今其例を一々舉れば幾と際限なかるべし、故に今は其二三を示すに止めん、先づ理學に就て數十年前までは科學的概括未だ狹隘にして光熱電氣



磁氣の四現象は各別種なる異類のものと思惟したりき、然るに數年前より概括の範圍は大に廣りて、右の四現象を合一して全く同種の現象となすに至れり、即ち此四現象は「エーテル」と名くる一物の異なる働き或は運動なりと思惟するに至れり、而も此の「エーテル」なる一物が果して實在するや否やといふことは未だ知らずして是只説明し得られざる多くの現象を説明し易からしむるために學者の假定によりて認められたる存在なり、説明の便宜を得んがために故らに設けたる想像物なり、假に其存在を眞とするも其如何なるものなるやは視たること感じたること實驗したることなければ毫も知る所あらざるなり、又其「エーテル」なる一種のものが如何様にして光熱電氣磁氣の如く大に異なる運動をなすや是亦た毫も知所あらざるなり。

近年發見せられたる「レットゲン」光線、「X」光線、「ラヂウム」光線等によりては物質的新性新力を發見せり、此發見なき以前物質は分子の集合に成り、分子は元子の集合に成り、而て此の元子は物質の本源にして測定し得べき重量を有すれども再び之を分解することは出來得られざる本源なりと思考せり、又十九世紀の半頃より此元子は皆同一類にして只其組成の異なるによりて相異なる元素を生ずるなりとは眞正の證明あるにあらずして思考するに至れり、即ち物質は一元に歸すてふ高尚なる學理は始まりたり、是れ物質を完全に概括するものなり、十九世紀の終りに及んでは多くの學者は皆な斯くあるらしきことなりと信じて此學説を贊せり、而も有形萬物が一元より出るといふ説が廣且高尚なるは、其ほご益々深くして説明し得られざるにあらずや。

此一元説が如何に深玄なる奧義なりといふも、決して實驗學の基本なる元則に反するものにあらず、而て却て近年行はれ始めたる學理こそ從來の元則を破滅するものなり、吾人の茲いふ實驗學の元則は數多あれども、其中主要なるものは三にして



一は量り得き重量を有するといふことは物体の性質なりといふこと  
 二は物体は惰性を有すること、即ち自ら運動すること或は他より受たる運動を自ら止ること能はざるは物体の性質なりといふこと  
 三は物質は新に一の生ぜらるゝこともなく、又一の消滅に歸することもなし、即ち「エネルギー」の不生不滅なりといふこと  
 理化学、機械学、天文学等の實驗に於ては以上の三原則を以て總ての計算測定を爲し居れり、此三元則は實驗學の始まりしより今日迄毫も疑ふべからざる定測と成來れり、然に現今は此三元則が破却せられ始たり  
 視よ千九百六年巴理府に刊行せられたる「物質の進化」と題せる書に博士ルボン氏が熱電氣、諸種の光線、ラヂウム、ヘルツの波動、燐光、紅色以下の光線等に就て爲したる多くの實驗を記し、且其實驗の結論、即ち此實驗より出べく思はるゝ元則を記したり、其詳細は高等科學を専門に修めたるものにあらざれば解する能はざるべきに由り、今其結論の概略を掲げん

一從來不滅と信じ來れる物質は其元子の繼續せる分解に因りて絶す徐々消滅すべし、而て之を稱するに一新語を以てして「ダイヤマテリアリサシオン」假に譯して「物質性脱却」といふ  
 二從來物質は惰性を有すと信じ來れり、即ち他より受たる「エネルギー」の他何の力を有せざるものなりと思へり、然るに之に反して物質は量るべからざる至大の「エネルギー」を有するといふこと、之を内元子（インテュラアトミック）の「エネルギー」といふ  
 三元子の自然的分解に因りて内元子の「エネルギー」は絶す、物質より流散す、斯絶す、流散する「エネルギー」が光熱電氣其他種々の光線の運動に表現するなりといふこと  
 四力と物質とは内元子の二つの異なる「エネルギー」の状態に外ならず、即ち物質は「エネルギー」の固定せる状態にして熱電氣光線は其不定なる状態なりといふこと



五此故に物質は自然に絶えず「エネルギー」と共に進化するものなりといふこと

六斯く「エネルギー」と進化せる物質とは漸次重量を有せざる「エーテル」に變化すべしといふこと等なり

四五年前右の如き結論を發表し始むるや、人々確く信じ來れる從來の元則に反するがゆゑに學者は驚いて之に賛同せざりき、然るに二年前より大學者の中にも之に賛同するもの多くあるに至れり、此新學説は實に科學の革命の如きものにして從來の物質に關係せる科學は爲に根本より覆へざるに至らん、今日まで毫も疑はざりし「エネルギー」の不滅物質の惰性と其重量等は、大に疑はるゝに至れり

之に依て見るときは、高等科學に於て概括の擴張即進歩するに從つて深直なる奧義は愈々多く新に生ずべしといふは明かなることならずや、斯確定せざる學問發明に依て絶えず變遷する學説、何千年間確信せる元則を

今日之を疑ふに至れること等を見ると、ときは學問の進歩によりて事物の眞を知り得るに至るべして、ふ説は盲目なる傲慢にして、理解ある眞面目の人のいふべきことにあらじ、彼の「巴理博士會員なるポローアツペール氏は左の盲目論者にあらず、前掲の演説中にもいへり

科學が確固不動のものなりといふは大なる誤謬なり、科學は益々深淵にして知るべからざるこの方に失望せずして、絶えず進むといふことのみと

機械學の例

機械學

以上論ずる物理學は純全たる實驗學なるがゆゑに、其學理元則等が發明に依て變ずるといふことも、理解ある人のためには左までに驚くべきこととにあらざれども、機械學の如く全く實驗のみに因て開けたる學術すらも、而も理化、天文、地質、博物等の學術と異り、全然數學的元則の上に立つ數學的學術と稱せらるゝものなれば、決して他の學術の如く其理論の變ず



ることはある可らざるものと多くの人に思惟せらるゝものすらも同じく其説の變更せらるゝことあるは驚くべきにあらざるや  
近年多數の大學者が彼の數學的元則に稍疑ひを存するに至れり、數學博士エミールピカル氏は千九百二年に刊行せる機械學を難すと題せる書に論じて曰く

現代の學者は昔日に異り概ね然らんといふことは太く嫌所なり此故に學者は顯微鏡を以て微細に鏡檢するが如く機械學をも嚴密に研究するに至れり斯して物の皮相のみならずその内狀の深處までをも觀察する底の人より視れば現今用ふる機械學の基礎たる元則は往古より傳來したるものといふも系統的のものにあらずして其中には非理なる曖昧なるもの多し例へば博士ドブレシネー氏が其著機械學の基礎の八十七頁に惰性を以て機械學の基礎なる元則とすれども粘着力、化合力、引力等を有し熱電氣等を發しつゝある物質が惰性なりとは誤

謬の元則たるなからんやと記されたるが如し元來世界萬物を一は力一は質の二元に分ちたることは何等の意味なるべきや一は何等なきなき物にして一は無形にもあらず有形にもあらざる力といふの説が而も是れ機械學の基礎たるなりさりながら斯る力は機械學的の力にあらずして形而上的の力なりと

尙又物の量とは何なるか量なるものゝ意義は數學者に由りて異なるのみならず全く相反するの意義に解せり即或學者は之を物の質量と見或學者は之を物の惰性量に解し或學者は之を物の力の量とする等の如し又彼の力の支持せらるゝ所の點なるものも是亦た一の想像にあらずや實際に於て物が之によりて運動すべきか尙終に近來新たに出でたる「エネルギー」説等に依りて見れば機械學は數學的學術なりといふも決して不變の學術にあらず博士ドランバラン氏曰く

「近來生じ始めたる種々の學問論より視るときは將來に於ては機械學



の元則に至るまでも漸次更新せらるゝならんと思惟せらるゝと  
 近世幾何學吾人は更に歩を深きに進めんか人の概ね思へるが如く純正  
 數學は精密なる學科にして全然眞理なるがゆゑに決して變更すべから  
 ざるものなりとは今日まで誰人も信じ來れるなり如何となれば數學上  
 の名題は相對的のものにあらずして絕對的のものなればなり之を疑ふ  
 ものは世界開闢より常人は勿論大學者にも之あざりさ然るに近年に  
 至て如何極めて高名なる數學大家ポアンカレ氏の言を聽け氏は科學  
 と假定と題せる書の一頁より二頁に至るの間に記していふ  
 「事物の皮相のみを研究するの人即ち普通の學說のみを研究する人の  
 目より視ば學術的の眞は疑ふを得ず又其論理は誤謬なしと爲す例へ  
 ば數學上の定理は明晰なる命題より確固たる推理を爲したるに因て  
 出たるものなりされば此等の定理に違ふべきものは有limitsの吾人と  
 自然界に存するものゝみならず無限なる造物主と雖も何物をか造ら

むには此等の定理に違背すること能ずとなせり斯る考は凡そ百年前  
 までは學者等の皆な肯定したる所なりしが然も今日に於ては是と大  
 に異なるに至れり」と

實に其言の如く現今世界に於て採用する所の幾何學は紀元前約三百二  
 十年希臘の數學家エウクリッド氏が十五卷の書冊に記述したるものなり  
 故に之をエウクリッド氏の幾何學といふ而て此の幾何學は絕對の眞にし  
 て之と異なる或は之に反對なる幾何學は決して立て得べからざるものな  
 りとは凡そ百年前まで何人も信じ來れる所なり而も今日に於ては然ら  
 ず前掲のピカルド氏が「近世科學」なる書に陳べて曰く

幾何學の公理中立證し得られざるもの少からず例へば幾何學の根本  
 なる公理同一平面に於ける一直線の傍に在る或點より右の直線に並  
 行すべき直線は一の他あるべからずといふの公理は立證し能はざる  
 ものにして而も唯極めて狹隘なる範圍のみに於て實驗するを得るなり



故に此は絶対に非ずして相對的の名題とす、人類なる吾人の考定せる  
想像に過すと

又幾何學者ル、メンテク氏は曰く

若も吾人が生活せる物質世界が今の世界に異なるものならば、吾人は  
今に異なる學說公理を考定せるならん、エウクリッドの幾何學の如き學  
理は想像だも能はざりしならん

然るに他の世界ならざる此の世界に於てゴース氏は千七百九十七年に  
續いてロバトチエフスキー氏及ボリアイ氏の三氏はエウクリッド氏幾何  
學と其根本の全然相異なる、尙又反對なる根本を以て新式の幾何學を組立  
たり、此幾何學に於て前掲の公理を解説すれば全く相反して同一平面に  
於ける一直線の傍に在る一點に於て其直線に並行せる直線は無數に引  
き得らるべしと、而て此幾何學を稱して過實的幾何學といふ、此幾何學に  
於ては一の三角形の角の和は二直角より少いといへり

其後數學者リエマン氏出で、エウクリッド氏幾何學にも、前の幾何學にも  
反對なる他の新幾何學を更に發明せり、此幾何學に於て前掲の公理は左  
の如し、同一平面に於ける一直線の傍に在る一點に於て其直線に並行せ  
る他の直線は一も引得られずと、又三角形の角の和は二直角より多しと  
之を要するに同一自然界に生活せる人類にして互に相反する所の三様  
の幾何學を立案せるものなり、即ち

- 一はエウクリッド氏幾何學にして之は拋物線的の幾何學なり
- 二はゴース氏ロバトチエフスキー氏ボリアイ氏幾何學にして之は過  
實的の幾何學なり

三はリエマン氏幾何學にして之は橢圓的の幾何學なり  
今日まで此三の幾何學を案出したるのみなれども、尙此他に數多案出せ  
らるべきなり、即エウクリッド氏幾何學の根本なる一公理を拒非する毎に  
一の新幾何學を案出すべし、斯る詔を始めて耳にしたる人は、定めて右様



二つの新幾何學の如きは決してエウクリッド氏幾何學の如く眞理に適るものならざるべしと考ふるなるべし然れども決して左にあらす其等の說中眞理に適ざるものは一もなしエウクリッド氏幾何學と等しく全く論理に合るものなり

以上論ずる如く科學の深奥まで研究して其免る能はざる缺點と改むべからざる不具なる所を知りたる人は決して學識深からざる人の如く妄に學問を賞讃し崇拜し信賴するが如きことを爲さざるなり

種類 右の如く理化學機械學等の高尚なる科學の基礎たる元則をさへ疑ふに至れりさりながら奧義の多き學問が獨右等深淵なるものゝみに止まらず博物學の如き極めて解し易き學問すらも其進歩に従つて今日まで明確に解し得られたる元則が解すべからざるに至れるなり

視よ千九百八年三月刊行の「アメリカンナチュラリスト」なる雜誌第四十二冊四百五十九號にシカゴ大學教授ウヰルリストーン氏は左の如きこと

博物學  
上種類  
の例

を記せるを

種類なる語は誰人も知れる所の通語なれども而も其意義は極めて不分明なり博物學の祖なるリンネ氏時代より種類とは何なるべきかといふ問題に對して満足なる解答は一もあることなし種と類との實際の別は到底了解し得られざるなり博物學上に於て種と類と科と變種との四つは曖昧混亂せり眞實にいへば是等の差別は學者が自分勝手に定めたるものなり二十世紀に於ける科學のために耻べきことなるも是唯人爲的分類といふべきものにして自然界に存するものにあらず而も是輕視すべからざる博物學上に於ける根本的問題に屬すと避雷針 又彼の避雷針の如き世界至る所用ひざるはなく發明當時より人皆非常に信用せる機械なりしが近年稍其功効を疑ふに至れるに非ずや是近年は極めて其微細の點まで嚴密に研究せられたるがゆゑなり千九百八年六月廿日發行の「エヌエヌ」といへる雜誌を讀に理學家ヘン

避雷針  
の例



氏は千九百三年に又理學家ロッキンガム氏及びガウエイン氏は千九百五年に、共に英國に於て大に避雷針を否認せり、氏等の調査する所に依れば、千九百一年より同四年に至るの間英國に於て、避雷針の装置せられたる家屋の損害を被りたるもの五百戸あり、尙又其後理學者シャップフェルス氏が自らの實見をブリュッセル大學會に報告せるあり、是は氏と實驗所に於て種々なる器械によりて避雷針の効驗を研究したるものなりしが、其實驗に於て、前の理學家三氏の結論と同一の結論なりき、即ち避雷針は如何なる場所に於ても、如何に装置さるゝも何時も無益なり、のみならず之が爲に却て屢危険を招くことありといふにありき。

然るに今や又伊太利の「ヴェルツトリ」氣象臺の「ガルツ」氏は「デイノヴェイ」リンセイ學士會に於て大に避雷針の効驗あることを賞讃せり、是れ前掲理學家の見る所と相反せるものならずや。

吾人は其眞偽孰にあるやを知らず、唯明かに知り得たることは雷電の如

何なるものなるかを今日まで未だ知り得ざりしといふことなり、雷電は放電なりといふの説は説明にあらず、其所謂放電とは何なるか、其出生、其爆烈と運動の法方は如何等、毫も知らざるなり、此の現象は我儘なる不規則なる現象はあらず、人は能く落雷といふ、然れども下方より上方に突撃する雷も屢々見る所なり、又雷電が彈丸の如くなること、往々ありて、斯る雷電は避雷針若くは金屬の太き建物の側を通過するも決して之に感應せざることあり、又此等の雷電は人体に負傷せしめずして、其皮膚を擦過し、時として極めて徐々として進み、或は停止し、河湖の水面を疾足する等のこと屢々あるなり、斯る我儘なる現象が如何にして説明し得べけんや、されば避雷針の効驗に就て反對なる説あるは毫も奇とするに足らざるなり、上來舉るが如き類例は此他尙際限なかるべし。





結論

以上論じ來りし所によりて視れば、實驗學の進歩が決して一般人民をして安穩に生活を営ましむるを得ず、社會少數者なる富豪は愈々其富を加へ社會の大多數者なる貧民は益々其貧を重からしむることは事實が證明する所なり、近くいへば一般人民のために生活は益々困難を究むるなり、次に科學の進歩によりて決して社會道德の進歩を見ること能はず、否却て政府に對して社會黨富豪に對して貧民工場主に對して職工資本家に對して労働者の憤懣衝突は更に劇甚なるに至れるが如し、要するに社會は益々不義不徳不孝不忠、亂行汚行に攪拌せらるゝなり、更に又實驗學の進歩が事物の眞を明確に知らしむるかといふに、是亦た然らずして却て今日まで思ひ及ばざりし深玄なる問題多く生じ、不可解なる奥義の數は愈々増加するなり、換言すれば有形界の力も運動も現象

も愈々複雑なるを知らしむるが如きに至るなり

此の三論題の疑ふべからざるごとより推究して吾人は如何なる結論を取らざるべきや

實驗學の進歩に關しては人によりて異なる三様の結論を取れり

樂觀的  
見解

第一 樂觀的見解、社會多數の人は近世珍奇なる發明に眩惑して、其視力社會の不潔と亂暴とに及ばず、妄りに科學を崇拜す、即ち彼等は科學萬能主義に陥り、實驗學を以て物質世界の何事をも解し得るに至り、終には社會の缺點を補ひ、空想を正し、誤謬不道德を矯を得べしとなし、實驗學を以て最大有益なるものと考へ、全く實驗學に信頼して安んずるものなり、是取も直さず人智を信じ、人間自らを頼むものにして、近世最も著しく此傾向を示せり、然れども此小冊子を熟讀せば、此結論は近世社會が經驗しつゝある所を顧みず、實驗學其ものゝ進歩し方と其變じ方とを考察せず、徒らに極端に馳たる早計の結論のみ、見界狹隘なる盲論稚説のみ



第二 悲觀的見解、其見解は右に反して實驗學は進歩するも絶す變遷し  
 曩に確固たるものと信じたる學理公理は破却せられ更に新説を生ずる  
 が如きことの頻々たるを見、事物の眞は結局不可知なり純正數學に於て  
 すら其絶對眞を知る能はずんば、明確疑ふべからざる者は一も存するこ  
 となし、されば吾人はスピノザ、カント、スペンセル、シヨフペンホーエル等  
 に従つて何物をも疑ふの他なしといふにあり、此結論を取りたるものが  
 所謂懷疑主義、不可思議主義、主觀主義等なり、此の懷疑主義にも温和なる  
 あり、過劇なるありて一定せず、甚しきは世界の存在も自己の存在をも疑  
 ふに至る、勿論彼等といへどもまさか存在せずとは主張せず、只存在す  
 るかせざるか其眞偽を立證し得られざるがゆゑに確認する能はずとい  
 へり、斯る懷疑主義は日本國にも追々流行の兆を見る、而も是れ極端に馳  
 たる謬見なり、彼等が斯る誤謬に陥る所以のものは、一は實驗學の他學問  
 と稱すべきものなしと思へるよりの誤り、二は實驗學の缺陷のみを見、人

智の薄弱なることをのみ考ふるよりの誤りならずんば、斯る結論  
 を取の果が不可解を絶叫して巖頭にも立つなれ、豈恐るべきにあらずや  
 第三 中庸なる見解、眞實は中庸に立てふ格言の如く、此見解は兩極端に  
 逸せずして右二見解の中庸にあるものなり、此故に實驗學を餘りに過賞  
 せず、信憑せず、さりとて又餘りに疑ふこともなし、到底不可解なるべきこ  
 と多くあるも、確然解決し得たることも亦た少からず、況や學問は唯實驗  
 學のみに限るものにあらずして却て之に優の學問も甚だ多きに於てを  
 や、是れ一般の學問に従て修身齊家の道を取り、徳道道理に依て生活し得  
 らると信するものなり、詳言すれば、實驗學の進歩によりて有形界を研究  
 するに従ひ、人智の極めて偉大なることを表顯すると同時に、又其微弱な  
 ることを愈々表現するなり、如何に人智が偉大なるや、凡四五十年前より  
 發明せる事物、蒸氣機關の完成せられたること、無煙火藥、猛烈なる爆藥、潜  
 航艇、操縦自在の輕氣球、諸多の電氣機、電話機、無線電信、レントゲン光線、X



光線「ラデウム」光線、化學上の珍奇なる實驗炭素、水素、酸素の溶解、外科手術等殆ど際限なし、今若し百年前に死したるものが突然蘇生し來らば、彼等は其全く轉覆せられたる別世界の如きを以て驚愕措所を知らざるならん、且又毫も感覺の力に及ばざる純正數學の如き餘りに深奥に過るかと思はる論さへも立てらるゝに至れり、是等に依て見るときは人類の具たる智力の如何に強大なるかには感嘆せざらんと欲するも得べからざるなり、されば右第二者の見解の如く人智を輕蔑し之を疑ひ之を排する等は如何にも極端なるものにあらずや

斯の如く一面には人智の強大なると同時に亦た云ふべからざるほど薄弱なるものたるなり、如何に珍奇なる發明實驗をなすも、亦學理學說を立するも是只第二原因に關するものゝみ、凡て事物の第一原或は其性質に關するの問道は人智の企及する所にあらずるなり、實驗學が如何に進歩するも斯る深き問題は解すべからざる奥義なること疑ひなし、要するに實

驗學を以ては萬物の皮相のみを知り得べし、其性質的のことは決して知り得られざるなり、故に右第一者の如く學問を過賞し過信することも是亦た極端にして淺薄狹隘なる智識の感嘆信用たるに過す嘗て英國大臣たりしバルフォール氏之に就て「信仰の根元なる書に論じて曰く

人の知るべき総ての問題を發明するためには實驗學は不充分なり、尙又或人のいへりし如く學術の助力によりて神秘奥義を人智より排除すること決して能はざるなり、吾人の死活問題に就て大に痛心すべき奥義は古代思想界よりも近代思想界に追迫し來れり、人生の本末即ち人間は何れより來れるか、何れに往かといふ、人生の死活問題を解決し得ずんば實驗學の効益は果して何なるべきや、實驗學の進歩によりて肉体的生活が安穩を得らるゝも、汽船の如く自由に操縦して空中に旅行し得るも、眞正の幸福、即ち精神上の快樂のためには何の益ありや、物質的快樂に満足し得るは、人に人の精神が淺薄なるものにあらず、深遠なる



此精神を満足せしむるためには、實驗學よりも高尚なる形而上學と宗教とは是非とも必要なり、無宗教なる多くの思想家までも實驗學の不足なる所は明かに知るに至れりと

佛國の文豪プルンチエル氏も亦た是と同様なる論を呈出して近年の思想界を騷擾せしめたり、是此小冊子の題名の「科學の破産」なる一論なり、プルンチエル氏は「決して物質的科學を輕侮したる人にあらず、却て其珍奇なる發明進歩には感嘆措ざりし所なり、彼は若し人が物質的科學のみを信頼して神學心理學倫理學の如き高尚なる形而上學を度外視するならば疑ひなく實驗學は破産の運命に遭遇すべし」と論せり、尙又多くの學者先生等の思へるが如く「若し實驗學のみを以て社會を治め人民を道義に導き生活を安穩ならしめ満足なる幸福を與ふるの目的ならば今の社會の状態を視るも既に破産したるものなり」と論せり、近くいへば此論を出したるプルンチエル氏は物質的學問の進歩の結果其影響等を極端に

誇大に贊美する先生方と奮闘したるなり、實に氏の論や眞實なり、實驗學は唯五官に感應する物質のみを研究するものなれば、物質以上のものには關係なきか或は之もあるも極めて微少な間接なるものなり、尤も人間は別に靈魂といふが如きものを有せず、尿が腎臟の分泌物なるが如く、智識も感情も道義も忠孝も愛國心も凡ての理想が皆是れ腦の分泌物なりと思惟せる先生ならば無論物質的學問の他何をも信じられざるならん、然れども幸にして一般の人も多數の學者も斯る非理想的の唯物論には同せず、人間は卑き動物に非ず、無形なる靈を具たるものと信じ居れり、是等の人のためには肉体的快樂物質的幸福のみを以て満足し得られざるなり、彼等は微なりとも世界萬物の第一原を認め、生命の本末を知らんと欲するなり、文學大家リットレ氏曰く、  
實驗學以上のことは人智の及ばざる問題なれども、而も人智の及ばず



といふことは存在せずといふの意ならず凡て斯る問題は際限なき空間の如し空間の存在することは明かに知り得れども其限界は到底知るべからざることなり之と同じく造物主の存在は之を知るも其無限なることは到底知り得べからざることなり斯る高尚なる問題は其他多くあり之を顧みずして實驗學のみを偏重する人は恰も片足を以て歩行する不具者に同じく其他に宗教と哲學とをも尊重するものは兩足を以て歩行する常人の如しと

數十年前より社會の傾向し始めたる所より觀察すれば社會は漸々二の派に岐れんとするものゝ如し即ち右のリットン氏が比喩したる所の片足を以て歩行するものと兩足を以て歩行するものと是なり所謂片足を以て歩むの人は物質的學術に溺れて智的傲慢に流れ全く唯物論に偏して靈的理想を拒否したるもの或は之に反して凡ての學術を信憑せざるがゆゑに凡ての理想を排棄して失望の淵に沈淪するもの其歸着は畢竟

同一にして是れに與するもの甚だ多からん

所謂兩足を以て歩むものとは人智の強弱兩面を洞見し其偉大なるにも眩せずさりとて又其微弱なるに失望することもなく事物の皮相を研究する點に於ては人智に信頼しより以上を研究するには人智の力のみを依頼せざるものにして是に同ずるものは如何にしても少からん

然して其何れが眞實なりや合理なりや社會の經驗せる殷鑑に適るや孔子を始めとしてスペンセル、ニーチエ等に至るまで總ての思想家の異論百出せるより見れば實に神學博士トマスと言の眞なるを知るなり曰く現世に於ては人智が量るべからざるは眞めり人智自らの力に解し得らるべき問題も曖昧にして明晰に了解し能はざるは必なり此故に智力以上の問題のみならず智力に及ぶべき問題すらも誤らざるために天啓の必要あるなりと

實に然り物質以上の眞を解するためには是非とも全智なる案内者を要



することとなり、尙終りに當りて右の兩派の中何れが高尙なるべきやといふに父母親戚郷國の存在を疑ひ、如何なる理想をも棄て、恰も怯懦なる兵士が戰場を遁るゝが如く社會の苦痛を脱せんがために華嚴の飛瀑に身を躍すほごに失望すると、又世の如何なる苦難とも奮闘して敗れず、如何なる障害よりも遁ず、人間自己の貴ことを視も驕ず、又自己の卑き弱ことを知るも失望せず、物質以上の理想、天の高が如き氣高き理想を以て世に處すると何れが高尙なるべきや

又其何れが幸福なるべきや、獸慾のみに充さるゝ人ならずして、多少にても智識的、道徳的教育ある人ならば、前掲樂觀主義と悲觀主義の人とは共に悲痛と欺罔との種子たらずんば、あらず、樂觀的見解を有するものは青年客氣の時代を過ぎ、稍沈着の心を生せる時に至りて、社會の愈紊亂する状態を目睹せば、如何、實驗學の進歩が毫も社會の缺陷不徳不潔、亂行汚行が矯正せらるゝことなく、却て益々其惡徳紛亂を増長するを知らば、其時

始めて自ら已を欺けるを悔、晩年に及びて煩悶、悲痛に苦めらるゝならん、又彼の悲觀的見解をなせるの人は、更に數層憐むべきものなり、彼等は青年時代より老年に至るまで、社會より放逐せられたるものと等しく、心中常に歡樂なく、何等の慰安をも有せずして、生ながら至然、枯死せる状態に生活するものなり

樂觀主義、悲觀主義の結果が斯の如くあるべきは、免るべからざる天下の規則なり、即ち総て極端なる主義は、道理と人性に背反するがゆゑ、人の心を苦惱せしむるの他結果あることなし、此二つの主義が弘布せらるゝに従つて、社會は不幸不義と欺罔とに充さるゝこと疑べからざるなり

〽

〽

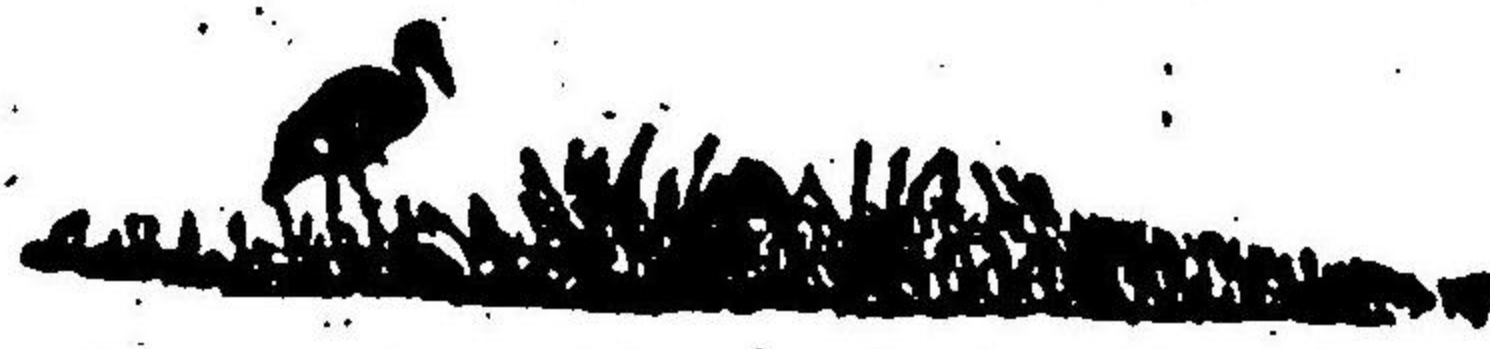
〽

〽



學問の破産終

(東京大司教伯多祿沙勿略認)





## 學問の破産終

(東京大司教伯多祿沙勿略認)

### 和佛協會主義目的

西歐の文士ドメストール曰く凡三百年來の歴史は、眞といふことに反抗する隠謀ならざるはなしと、蓋し是れ特に宗教的の眞を指したるものゝ如し、而て又総ての宗教中特に此隠謀の標的となりたるものは天主教なり、天主教に對する虚偽、邪論、誹讖、讒謗、偏見、僻説は枚擧に遑なきはを夥し、是等有ゆる妄見謬説中滔々として最も世に行はるゝものは、天主教は頑陋守舊の道にして毫も進歩發展の氣力存せず、駸々たる社會の趨勢に伴はざるのみならず、十九世紀の半より長足の進歩をなせる實驗學に毫も適合せざるものなりといふこととなり、此偏見は信仰と科學とが全然絶縁せりと稱へらるゝはと世に流行するに至れり、然しながら天主教の教義、其進歩を促すに與つて力ありたりしこと、及有るべきこと、其眞正の文明に及ぼせる偉大の





影響等を確認せる所の識者にありては、斯る僻説を耳にするも微少も齒牙に懸けず單に一笑に附し去るに過ぎざれども、研究もせずして漫然此誤謬に欺騙せらるゝもの、社會の上流に至るまで甚だ少しとせず此に於て佛京巴理及我東都に在る天主教家なる學者有志慨嘆の餘相謀りて、知らず識らず此の偏見に謬まれつゝある所の滔々者流の迷想を排せんことを期し、宗教と科學とは全く相一致するものにして毫も乖戾するものに非ることを知らしめんがために、宗教的科學的の小冊子を屢刊行して況く世に頽たんと、乃ち當明治四十二年一の會を組織し、之を教學研鑽和佛協會と稱す。

當初本會を設立せんとするや、高名なる地質學大家にして、巴理博士會院の終身書記なる博士ド、ラッバラン氏が卒先贊同せられ、熱心本會の事業を扶翼せんことを約されしが、不幸にして博士は二堅のために昨年中不歸の客となられたること、本會のために痛惜に堪えざる所なり

本會は巴理と東京とに委員部を置き、委員諸氏等専ら事業に該る其氏名左の如し

在巴理委員

佛國造船總監巴理博士會員

伯爵

エミール、ベルタン

巴理大學教授(無線電信發明者)

博士

プランリ

醫學博士

スルブレ

醫學博士

ゴア

醫學博士

ブル

理學博士

ド、キルワ

在東京委員

帝國大學教授正四位勳三等

理學博士  
藥學博士

長井長義



帝國大學雇教授

哲學博士

フオンケール

陸軍技師正六位勳四等

松岡一松郎

巴理ポリテクニク卒業

海軍少佐從六位勳四等功五級

山本信次郎

第一高等學校教授從六位

杉田義雄

林壽太郎

本會の刊行する小冊子は獨り哲學宗教のみならず、教育、道德、時事、社會、科學等にして苟も宗教に多少の交渉ある問題は撰む所ならず、毎年少くとも六七を下らざるべし  
本會の事務所は、東京小石川區關口臺町十九番地に置く、若し通信其他の事項に就て本會に用向ある方は同所ドルアル、ド、レゼー宛にせられたし

博士ド、ラッパラン氏原著

### ○物界に顯はるゝ智的計畫

全一冊 代價郵税共金拾五錢

本書は博士が其深遠なる宇宙間に顯はれたる智識の跡を指摘して世界は一大智的計畫によりて造られたることを證明したるものなり

博士スルツレー氏原著

### ○智識と脳髓

全一冊 代價郵税共金拾五錢

本書は脳の解剖生理學より脳髓は智識の直接發動原因にあらずして其働用は智識活動の必要條件たるに過ぎざることを論明し、智力を説明するは機關主義にあらずして精神主義にあるべきことを結論したるものなり

博士ド、キルソン氏原著

### ○最近進化論

全一冊 代價郵税共金貳拾錢

本書は進化論を誇大的折衷的穩和的の三種に分類し最近の實驗に因つて誇大的折衷的進化論を駁し、現今進化論の勢力は逐次衰退に傾き稍學界に命脈を保てるは獨り穩和的進化論のみなることを論述したる最も嶄新なる良書なり



帝國大學教授 哲學博士 フォン・ケルン

陸軍技師正六位勳四等 松岡 一松郎

巴里大學博士 海軍少佐從六位勳四等功五級 山本 信次郎

東京高等學校教授從六位 杉田 義雄

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

東京高等學校教授從六位 林 壽太郎

博士ド、フッパラン氏原著

○物界に顯はるゝ智的計畫 全一冊 代價郵税共金拾五錢

本書は博士が其深遠なる宇宙間に顯はれたる智識の跡を指摘して世界は一大智的計畫によりて造られたることを證明したるものなり

博士スルツレー氏原著

○智 識 と 腦 髓 全一冊 代價郵税共金拾五錢

本書は腦の解剖生理學より腦髓は智識の直接發動原因にあらずして其働用は智識活動の必要條件たるに過ぎざることを論明し、智力を説明するは機關主義にあらずして精神主義にあるべきことを結論したるものなり

博士ド、キルツン氏原著

○最 近 進 化 論 全一冊 代價郵税共金貳拾錢

本書は進化論を誇大的折衷的穩和的の三種に分類し最近の實驗に因つて誇大的折衷的進化論を駁し、現今進化論の勢力は逐次衰退に傾き稍學界に命脈を保てるは獨り穩和的進化論のみなることを論述したる最も嶄新なる良書なり



ク、フエーラン氏著

○聖書？ 教會？

菊版半切廿七頁 郵税貳錢

フエーラン氏が教權の所在は聖書にあるか將た聖會にあるかを最も簡便に論じたる布教用小冊子なり

ドルアール、ド、レゼー師著

○奇異なる團體

菊版半切廿九頁 郵税貳錢

此小冊子はドルアール師が言文一致を以て人情習慣に反せるも幾多の侵害を被むるも良好なる成功を得社會に一大勢力を有しつゝ、屹立せる世にも不思議なる一團體の存することを紹介したるものなり

山口鹿三氏著

○加藤博士ノ謬説ヲ匡ス

菊版半切三十頁 郵税貳錢

山口鹿三氏が加藤弘之氏の基督教に孝道忠君愛國を教ふるの義無しとせる謬説を捕へて實例上より其妄を辯じたるものなり

帝國大學教師ケーベル博士著

○神學及中古哲學研究の必要

全一冊 代價郵税共金拾錢

此書はケーベル博士が帝國大學に於て中古哲學史を講ずるの準備として講述せんとせる原稿を直に奇蹟に附したるものなり

ドルアール、ド、レゼー師著

○眞

四六版半切 郵税貳錢

右は眞理の才智によりて出でたるものなれば昨の是今の非なりといふ流行の謬説を通俗的に駁述したる布教上最も便利なる小冊子なり

リヤヨール師著

○ジヤンダーク

全一冊 代價郵税共金拾五錢

此書はジヤンダークの事蹟を靈的見地より解決したるものにして又最も事實の真相を略記したる好傳紀なり



博士アッセル氏著

# ○吾は何故公教徒となりしか？

菊版半切五十六頁代價郵税共五錢

本書はプロテスタン教徒なる米國醫學博士が天主教に歸正したる自己の思想變遷の動機より其經路を誠實に告白したるものなり

博士アッセル氏著

# ○不

# 思

# 議

菊版半切圖入 郵税共金五錢

ル・ドの奇跡中にて最著名なるペトロドルデル氏の骨折が不可思議なる平癒をなしたることを科學的に證明したるものなれば超自然力の存在を否認する現代思潮に向つて之を駁撃するに最も有益なる好著なり

明治四十四年一月七日印刷

明治四十四年一月十日發行

定價金拾錢

譯者兼發行者

教學研鑽和佛協會

東京市小石川區關口臺町十九番地

和佛協會代表者

林 壽太郎

東京市小石川區關口臺町十九番地

印刷者

藤 井 治 和

東京市小石川區關口臺町十九番地

印刷所

和佛協會印刷部白王舎

東京市神田區多町一丁目三番地

發賣元

三 才 社

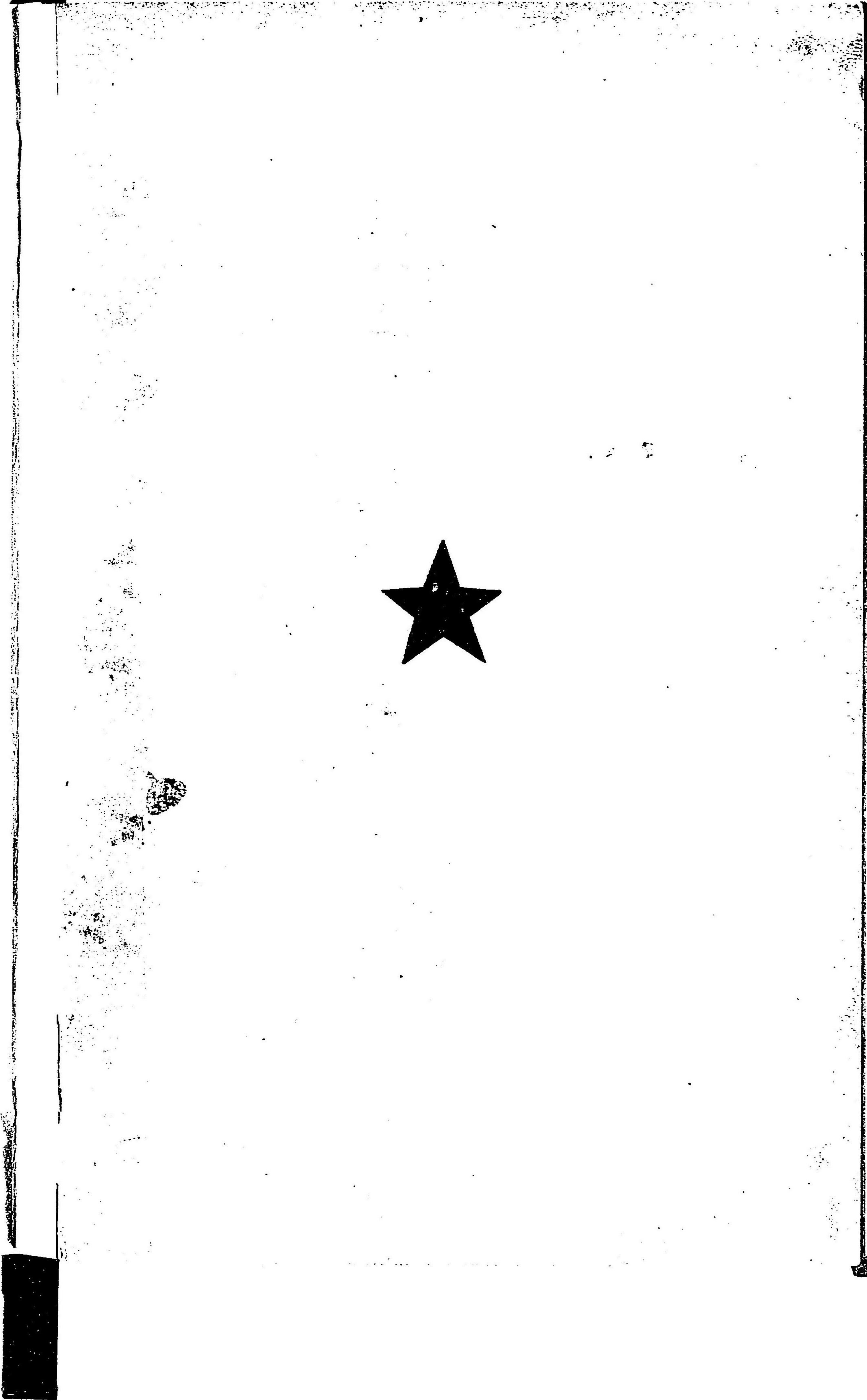
東京市神田區錦町一丁目十番地



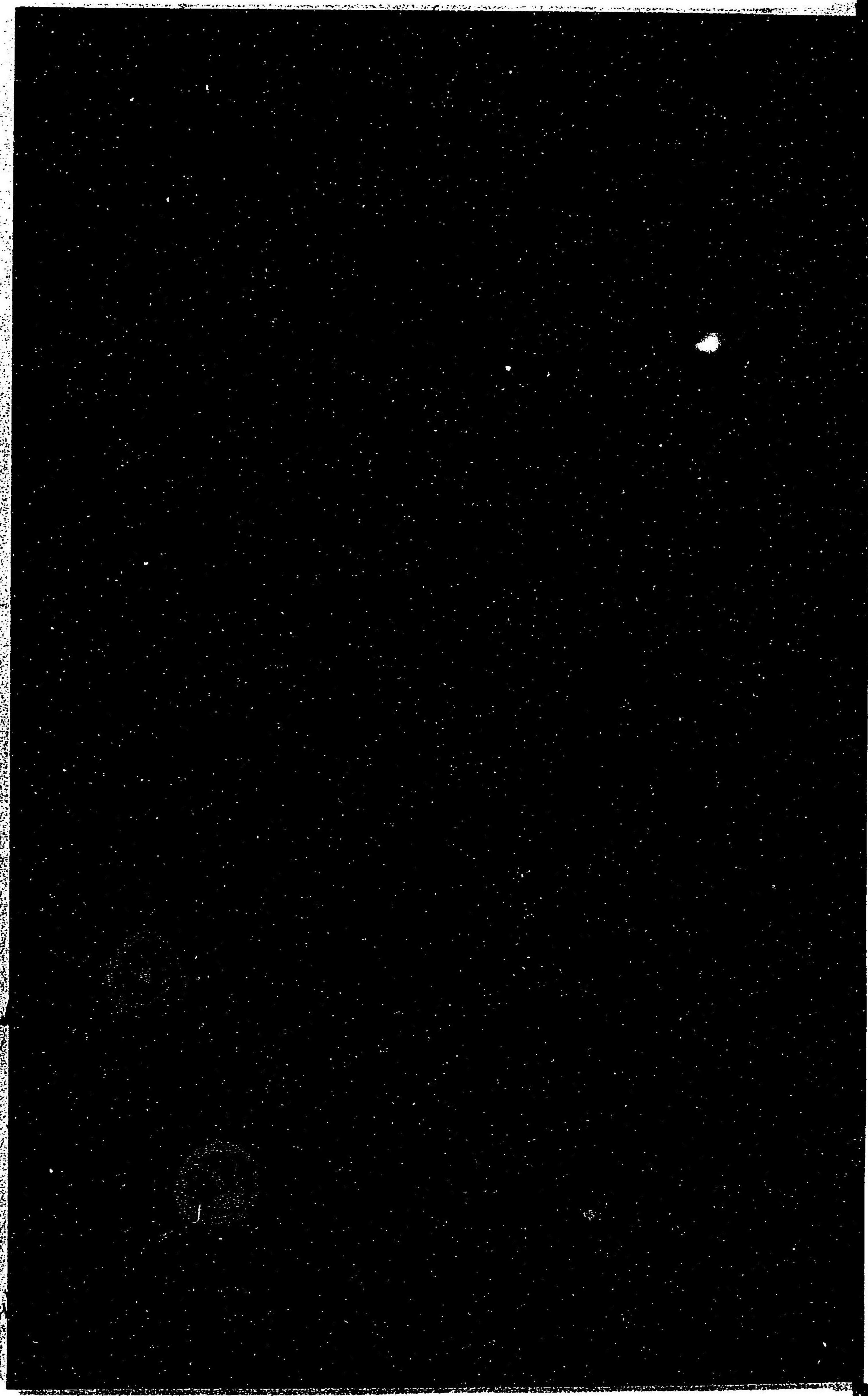


264  
681

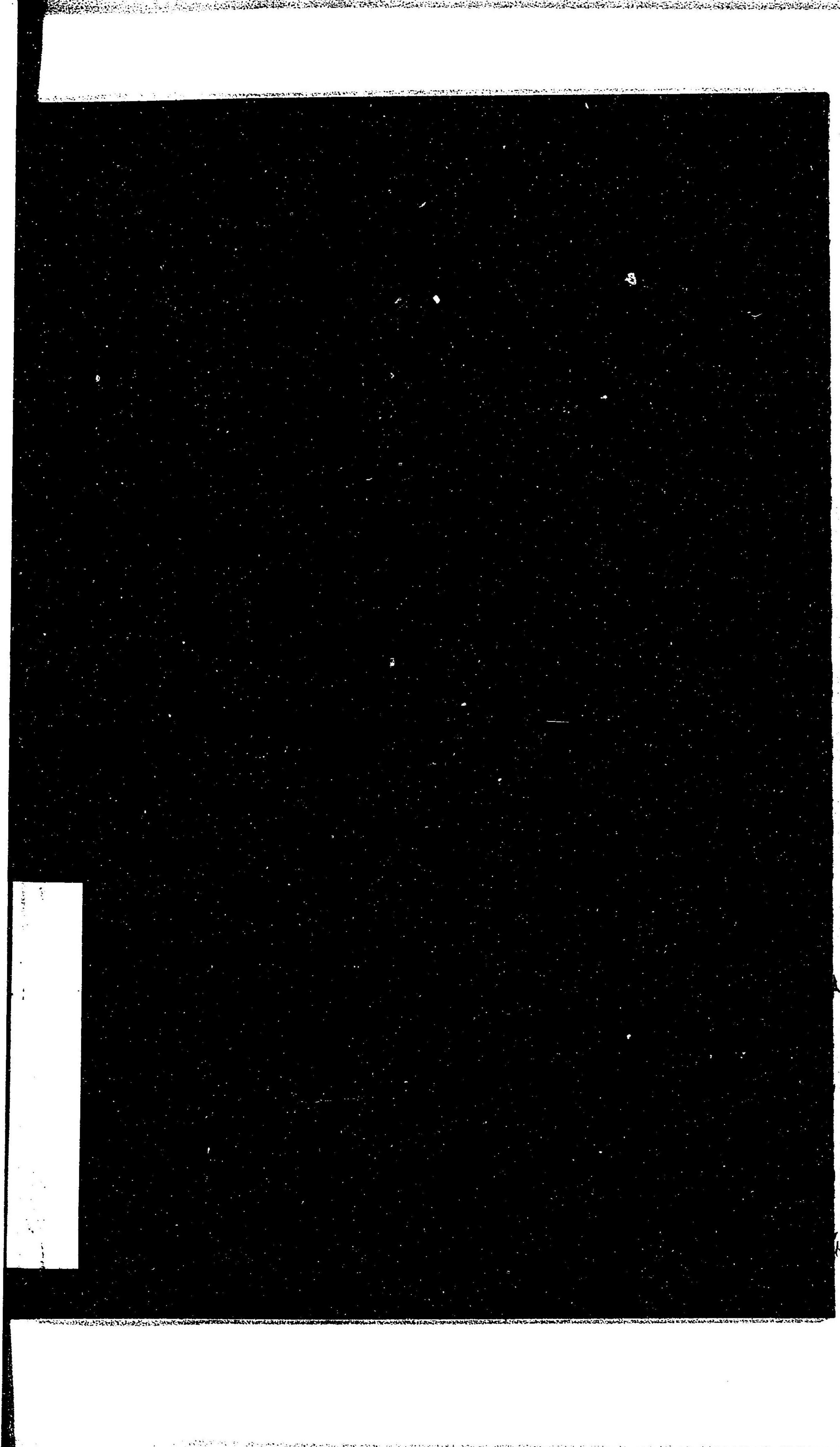












Small white rectangular label with faint, illegible text.



特45

147

学問の破産

国立国会図書館

050008-000-7

特45-147

学問の破産

ドルワール・ド・レゼー/著

M44

BEA-0169





